

フランス語における職業名詞の女性化 カスティーリャ語との比較*

藤村逸子 糸魚川美樹

1. はじめに

スペインの新聞 *El País* (1998/1/11) 紙上に、"Académicos contra señoras ministras. Las carteras ocupadas por mujeres trastornan el idioma en Francia" 「女性大臣に反対するアカデミー会員－女性大臣の就任がフランスにおいて言語を混乱させる」という記事が掲載されている。1997年6月のフランス総選挙のあと、就任したばかりの「女の大臣」が自らを《Madame la ministre》と呼び始めたことに反対し、アカデミー・フランセーズの会員3名が、《Madame le ministre》という従来どおりの呼称を使うようにと、ついにはシラク大統領に *Le Figaro* (1998/1/9) 紙上で訴えたという内容である。

この記事は、フランス語と同様にロマンス語の一つであり、「男性」・「女性」という文法上の性の区別のあるカスティーリャ語で書かれているが、女の大臣を指すのに、女性形の女性名詞 *la ministra* が当然のこととして用いられている。名詞が人間を指す場合に、指示対象の性と文法上の性の一致が原則とされる両言語において、一方のカスティーリャ語では *la ministra* が完全に一般化しているのに対し、他方のフランス語では「女の大臣」が *ministre* を女性形冠詞とともに使用して自らを称することが、社会・政治的な問題となり、権威筋から異議申し立ての声上がる。

このようにこの2つの言語のあいだには興味深い違いが存在するにも関わらず、名詞の性に関する対照研究は少なく¹、とりわけ、最近の職業名詞の女性化の経緯を追ったものは未だ実現されてはいない。フランスではこの問題にとりくむために、*Rapport sur la féminisation des noms de métier, fonction, grade ou titre* (職業、役割、地位、肩書の名称の女性化に関する報告書) を、1998年10月に政府の用語審議会がまとめたが、ドイツ語、イタリア語との比較はあってもカスティーリャ語との比較はなされていない。本稿では、職業名詞の女性化に関するフランス語・カスティーリャ語の比較対照研究の最初の試みとして、女性化の理由・方法・成果を検討し、その類似点と相違点を明らかにすることを目的とする。

なお、本稿では、指示対象の性の別を示すために「男」「女」、文法上の性の別をしめすために「男性」「女性」という用語を使用する。

2. すずんだカスティーリャ語・おくれたフランス語

la ministre という表現が正当なものかどうかをめぐるこの論争は、1997年の末から1998年の秋までの1年間、言語の問題に敏感な一般のフランス人、知識人、言語学者を巻き込んで大論争となった。主として *Le Monde* と *Le Figaro* を舞台にして繰り広げられた議論の多くは、あえて単純化していうと、「純粋で正しいフランス語」を守ろうとする言語的保守主義（アカデミー・フランセーズ側）と、現実世界の要請に応じて言語を変えようとする革新主義（大統領および社会党政府側）の争いであったといえよう²。

「男性」「女性」という分類の文法上の性をもつ言語において、「女」の表され方という議論はめずらしいものではない。特に職業名詞の女性化に関する議論は数多くなされている。イタリア語、スペインのカタルーニャ語においてもこの問題は議論されてきたし、「男性」「女性」「中性」という性をもつドイツ語も同様である。そして、職業名詞の女性化が非性差別的言語使用のための言語改革の一部と考えられていることもこれらの言語に共通している³。

しかし、*Le Monde* (1998/7/7) の特集のタイトル "La France est l'un des derniers pays où la féminisation des titres fait débat" 「フランスは肩書の女性化が論争になる最後の国のひとつである」が示すとおり、少なくとも1998年以前のフランスのフランス語が、フランス語圏の他の国（カナダ、ベルギー、スイス）のフランス語、ヨーロッパの他の国の言語に比べて、女性化の不十分な言語であったことに間違いはない。Yaguello (1978: 138) は、la professeur(e) 「高校以上の教員、大学教授 [女性]」が公的に認められるようになるは50年かかるだろうと予測したし、1994年にヨーロッパ議会は、フランスのフランス語を名指しして、女性化を勧めるよう勧告を行っている (introduce in French the feminist form of titles and names of functions into current language, for instance by extending and implementing the French circular of 11 March 1986 on feminisation of names of professions, functions, grades or titles. (Recommendation 1229))。

一方、カスティーリャ語は、*Le Monde* (1998/8/10) に掲載された改革派側の読者からの投書も指摘するとおり、フランスの模範となるべき言語である。

... l'espagnol. Là non plus, le genre neutre n'existe pas : et précisément parce qu'il n'existe pas, tous les titres sont féminisés, en conformité avec la grammaire et avec la logique : la decana (la doyenne de faculté), la diputada, la ministra, la presidenta, la senadora, etc.

(...スペイン語にも中性は存在しない。そうだからこそ、スペイン語では...全ての肩書は女性化され、文法と論理に整合している。la decana 「学長」、la diputada 「代議士」、la ministra 「大臣」、la presidenta 「長」、la senadora 「上院議員」など。)

フランスにおいてフランス語を守ろうとする保守的な勢力が強力であることは認めたとしても、この2つの言語のあいだの大きな差異はそれだけで説明できるのだろうか。この疑問が本稿の根本的な出発点である。

ところで、女性化が意味するもの、具体的に指すものは、言語や時期によって異なり、統一した定義が与えられているわけではない。冒頭の記事におけるフランスのフランス語のように、「女」に言及する職業名詞の性を「女性」にすること、つまり、le ministre が le/la ministre になるという統語的一致を意味する場合もあれば、カスティーリャ語のように、la ministro から la ministra というように形態的一致を意味する場合もある。この場合、女性化は「女性形化」ということになる。カスティーリャ語では、「男性」の総称的・包括的使用を避けるということも同時に議論されてきた。カタルーニャ語においてもカスティーリャ語と同様である (Diputació de Barcelona: 1999)。しかし、現在フランスで行われているような、計画に基づいた政策的な動きとしてではなく、日常の言語変化の中で女性化が進むということも十分に考えられることである。本稿では、女性化を「職業名詞の女性名詞化ないしは女性形化」と定義して用いる。

3. フランス語とカスティーリャ語の文法上の性の特徴

文法上の性は3つの観点から考える必要がある。統語論的観点・形態論的観点・意味の観点である。これらの点に関してフランス語もカスティーリャ語も、大枠としては同じ特徴を共有している。

まず、最初に統語論的観点であるが、名詞は男性か女性かどちらかのグループに属し、グループに共通した統語的な振舞いをする。すなわち、当該の名詞を修飾する冠詞・形容詞、またはそれを受ける代名詞の性の一致の問題である。つまり、テキスト内の「指示」の一貫性にかかわり、テキストの「結束性」(ハリデー・ハサン：1976)を高めるという役割を果たす。

次に形態論的な観点は、名詞の語形の問題である。人間を示す名詞の場合には、「男性」と「女性」で語尾の形態を変えることが多いが、男女同形の名詞も存在する。カスティーリャ語では、「男性」と「女性」の語尾は、-o/-a の対立となることが多い。前述の女性形名詞 decana, diputada, ministra, presidenta, senadora の男性形は、それぞれ、decano, diputado, ministro, presidente, senador である。フランス語では、女性形の作り方は複雑であるが、カスティーリャ語と比べると、男女同音の割合が高い。Khaznadar (2000)によると、男女同形の名詞が29% (secrétaire)、発音上は同音だが正書法上は異なる名詞が6% (envoyé (e))、発音上、男性形の最後に子音が1つ加わるものが27.4% (étudiant (e))、

男女の接尾辞が異なるものが27.6% (danseu(r/se)) となっている。フランス語で女性化がすすまない原因の1つはこの語形の問題だと言われて来た。ただし、Houdebine-Gravaud (1998) の調査によると、15才以下の子供と外国人はどのような名詞も苦もなく女性化するという事なので、これは、規範意識の問題だと考えられるだろう。

名詞の形態論・統語論は、性・数というペアで語られることが多いが、性と数ではその生産性において大きな違いがある。数は、指示対象に密接に結びついた問題であり、生産性は高い。基本的に、必要とあればどのようなものでも複数にすることが可能であるが、性はそうではない。数は一般に、単数でも複数でもカテゴリー（意味）が変わることは少ないが、性の変化はカテゴリー（意味）の変化に連動する。カテゴリーの問題と直接関連するのは、語形である。指示対象の性が変わったからといって、自動的に語形も変わるというわけにいかない理由はここにある。

言うまでもなく、カスティーリャ語・フランス語ともに、無生名詞にも文法上の性がある。無生名詞に関しては、指示対象の特徴と文法上の性の間に有縁性はない。一方、人間を表す名詞に関しては、名詞の文法上の性は、名詞が指示する指示対象の性に一致するのが原則である。フランス語にもカスティーリャ語にも、文法上の性と指示対象の性が一致しない語は存在し、使用頻度の高いものとしては、la personne/persona（人）⁴、la victime/víctima（犠牲者）などがある。このグループには、さまざまなタイプのもが存在するが、全体としては少数派にすぎず、フランス語においてさえ、人間を表す名詞の90%以上は、指示対象と文法上の性が一致する。

原則として動機付けがないはずの、無生物名詞に関して、フランス語とカスティーリャ語には、興味深い対立を見ることができる。藤田（1999：6）が指摘するように、フランスでは、自動車（une voiture [女性]・une auto [女性]）を人間の女に見立てることは広告の世界の常套手段である。また、エッフェル塔（la Tour Eiffel [女性]）を「パリの老婦人（la vieille dame de Paris）」と擬人化することはあっても、凱旋門（l'Arc de Triomphe [男性]）をそのように擬人化することは考えられない。女性化論争においては、アカデミー・フランセーズ [女性] が、「コンティ河岸の老婦人（la vieille dame du quai Conti）」と（皮肉をこめて）呼ばれることもあった（*Le Monde* (1991/6/11)）。つまり、無生物名詞であっても、文法上の性と指示対象の性は、完全に恣意的な関係にあるとはいえず、藤田はこれを、「ある名詞が言語上『男性』あるいは『女性』という genre をもつが故に、その指示対象も男あるいは女という sexe をもつものとして意識されるのであろう」と説明する（1990：7）。

しかし面白いことに、カスティーリャ語では全く逆の現象が観察できる。たとえば、次の例のように、「糞」を意味する女性名詞 mierda は、人について言うときに、ののしりことばの「くそつたれ」という意味で、指示対象の性に呼応して、el/la mierda のよう

に、文法上の性を変える。

- 1) Eres un mierda. (Adolfo Aristrain 監督映画 Martin [hache] (Tornasol films: 1997))
(このくそやろう [男性])
- 2) Ese tío es un mierda. (Gutiérrez Cuadrado[SALAMANCA]: 1996: 1029)
(そいつはくそおやじだ [男性])

無生物名詞であっても、文法上の性と指示対象の性に有縁性があるのをまれに見ることができわけだが、そのありさまは両言語で必ずしも同じでない。カステイーリャ語では、指示対象の性が名詞の性に影響を与えて、文法上の性を変えることがある。フランス語では逆に、文法上の性の力が強く、指示対象は文法上の性にあわせた「性」をもつことになる。

4 . 職業名詞の女性化が必要な理由

4 .1 性差別としての文法上の性

人間を表わす名詞の中で、職業名詞の女性化が特に問題になるのは、職業がその時代の性認識と強く結びついているからである。女の職業、男の職業という区別が明確にあった時代には、それを表わす名詞はそれぞれ女性名詞・男性名詞という文法上の分類と一致していた。しかし、性役割の境界が曖昧になるつれ、文法上の分類と一致しなくなる。「女の社会進出」ということばで表わされるように、多くの場合男の分野への女の進出により、性の役割分担の区別が曖昧になる。それまで男性名詞で事足りたものが、「女」に言及する際にどう表わすべきかという問題が生じる。

「新しい女」に男性形名詞を使用するというのが、当初、両言語に共通して観察される現象である。したがって、「女の社会進出」は言語に十分に反映されず、現れるのは「女」の伝統的な職業ばかりで、社会の伝統的性役割分担が言語の中に維持されると憂慮されきた。つまり、「女の不可視性」という問題が浮上する。このことと、「男性」「女性」という対立のうち、「男性」が総称的・包括的に使用されることを合わせて、「言語における女の隠蔽」と呼ばれてきた (García Meseguer, 1988)。パトラー (1990 : 19) が言うように、「女を十全に適切に表象する言語をつくりだすことが、女を政治的に可視化するのに必要だと思われ」、職業名詞の女性化が訴えられることになる。以上、職業名詞の女性化が浮上するところまでは、両言語は共通した問題を抱えている。

この問題を別の視点から考えよう。「女」の領域に進出した「男」はどのように表すのかということである。

「男性」の無標という性質が男の表され方にいつも何の不都合ももたらさないことと軌を一にして、「女」の領域に進出した「男」の職業名はいつも容易に「男性化」される。藤田(1990:10)によれば、「(フランス語の)職業名詞は男性形から女性形を作るのが原則であるが、*couturier* は逆で、17世紀からあった女性形 *couturière* 「お針子」をもとに、18世紀に「仕立て屋」の意味で男性形が作られた」という。そしてその後、*couturier* は「ファッションデザイナー」になった。興味深いことに、これと全く同様の経緯でカステーリャ語の *modisto/modista* 「婦人服仕立て屋」が形成されている。「仕立て」が一般に「女」の職業であり、*modista* がもっぱら「女」に用いられたため、もともと *-ista* という男女同形の接尾辞を持つ語であったにも関わらず、「男のファッションデザイナー」を意味させるために男性形 *modisto* が形成されたのである。形態論のルールからすれば、*el/la modista* となるはずの名詞が、*la modista* とはちがう職業だということを表すために *el modisto/la modista* として語形の対立がつけられた。

「女」を表わす場合は、それまで「男」に用いていた名詞に女性冠詞を付すことで両性に共通の名詞とする場合や、フランス語の *le ministre* のように、そのまま男性名詞として「女」に用いられる例が多くあるのに対し、「女」に用いられる名詞がそのまま「男」を表わすために使用されている例はない。*sage-femme* 「産婆(賢い-女)」の職につく「男」が80年代に出現した際に、アカデミー・フランセーズはただちに *maïeuticien* という立派な男性名詞を作った(が、まったく使われなかった)ことは、女性化推進派から長く揶揄されることとなった⁵。

以上のように、男女の区別による表され方の非対称性は厳として存在し、両言語を通じて女性化が政治的な問題としてとりあげられることになる。

4.2 道具としての性

4.2.1 文法上の性と指示対象の性の一致

文法上の性と指示対象の性が、単純に結びついているカステーリャ語では、「女」に「女性名詞」を用いることは職業名詞において一貫している。したがって、20世紀前半、男の領域に進出した女たちは自分たちを、*la abogado* (弁護士)、*la catedrático* (教授)のように「女性形冠詞+男性形名詞」で表現していた(Campo Alange: 1964: 229)⁶。

3) ..cuando el tribunal de Londonderry condenó a su cliente, la diputado por la circunscripción de Mid-Ulster... (*MUNDO*, 1970/1/10) (Mid-Ulster 選出の代議士 [女性+男性形] である、依頼人を Londonderry 裁判所が有罪判決を下した際、)

4) La actual primer ministro, Indira Gandhi, es también jefe del partido, como sucede en Inglaterra. (*Blanco y Negro*, 1970/4/4) (現首相 [女性+男性形] インディラ・ガンジー

は、イギリスの場合と同様、党首 [男性形] でもある。)

- 5) Entre las dos posturas existe la realista que podría encarnar la abogada María Antonio Lozano:..(Blanco y Negro, 1972/3/4) (弁護士 [女性 + 男性形] マリア・アントニオ・ロザノが演じる現実主義者は、その二つの立場の間に存在している)

フランスでは1985年に有名な「プリウール大尉事件」が起こった。大佐を意味する capitaine は当時、女性名詞として使うことができなかったために、男性名詞の le capitaine が「妊娠した (enceinte [女性]) 」という話になり、マスコミが話題にしたのである (Yaguello : 1988、藤田 : 1990)。当時のシラク首相による「プリウール大尉事件」に関するコミュニケをカスティーリャ語に翻訳すると (6) のようになる。性の一致に関して全く問題は生じず、女性名詞の la capitana を中心にして、統語的・意味的に緊密な関係が見てとれる。

- 6) La capitana Prieur está actualmente encinta y el acuerdo preveía que en estas circunstancias ella podía ser repatriada a París. (プリウール大尉は現在妊娠中であり、この状況では協定でパリへの帰還が許される見込みである。)

フランス語では次のとおりである。

- 7) Le capitaine Prieur est actuellement enceinte et l'accord prévoyait que dans ces circonstances, elle pouvait être rapatriée à Paris. (le capitaine 以外は、すべて「女性」)

藤田 (1990) は、「le capitaine を男女同形の名詞として la capitaine に改めれば問題は起こらないのに」と述べているが、フランス語ではそれには強い抵抗があった。カスティーリャ語においてまさに何の問題もなく、自由に女性冠詞をつけることができるのとは対照的である。フランス語では (7) のように、形容詞を指示対象の性に一致させて、女性形にするのはずっと簡単である。確かに、le capitaine [男性] が妊娠するというのは、ぎょっとする話ではあり、enceinte を男性名詞に一致させて、enceint にするわけにはいかないために話題になったのだが、主語と形容詞が不一致の文をフランス語に見つけることはそれほどむずかしいことではない。

- 8) Mon professeur est gentille. (私の先生 [男性] は親切だ [女性] (口頭で))

- 9) ...mais le premier ministre n'est pas vraiment inquiète,... (FR3, 1991)

(首相 [男性] は、それほど心配していない [女性] ...) (Khaznadar : 1993より)

4 .2 .2 照応の問題

文法上の性には、先にのべたように、テキストの一貫性を保証するという役割がある。冠詞や形容詞や過去分詞の一致は、情報という観点からすると余剰な付け足しにすぎない場合も多いが、どの名詞を修飾しているのかを明示して曖昧さを取り除く働きをする場合もある。しかしテキストの一貫性にとってもっとも重要な役割を担うのは、人称代名詞を始めとする文脈指示の照応詞である。カスティーリャ語では、主語人称代名詞のないゼロ照応がよく行われるが、フランス語ではゼロ照応は不可であり文法上の性が果たす役割は大きい。照応表現の使用のルールが破綻するとテキスト内世界の独立性が失われ、外界の情報の助けをかりることなくして、テキストを理解することはできないという状況におちいることになる。ところが実は、フランス語において、指示対象の性にもっとも簡単に一致するのは、照応表現である。

1977年2月9日の条例は、次の例を挙げて、このような照応の不一致を認めようと許可を与えている。「女」が男性名詞で示されていて、指示対象と名詞の性の間に不一致がある場合には、冠詞と形容詞は必ず名詞に一致しなければならないが、代名詞は指示対象の性に一致させてもよいという内容である。

10) Le français nous est enseigné par une dame. Nous aimons beaucoup ce professeur. Mais il (elle) va nous quitter. (フランス語は女の人 [女性] に教えてもらっている。私たちはこの先生 [男性] が大好きだ。しかし、彼 (彼女) はもうすぐいなくなる。)

当然ながら、カスティーリャ語ではなんのトラブルも生じない。

11) El francés nos es enseñado por una dama. Amamos mucho a esta profesora. Pero (ella) nos va a dejar.

以下に挙げた (12) も (13) も、下線部の人物が同じ人を指しているのかどうかどうかについては、このテキスト以外の情報がなければ判断がつかない。誤解の原因にもなりかねないし、テキストとしての質にも問題をもたらす。

12) Quand vers minuit, samedi 27 novembre. Helen Clark, a enfin ouvert sa porte aux caméras de télévision qui attendaient depuis des heures sous une pluie diluvienne, le futur premier ministre s'est excusé d'avoir mis si longtemps à reconnaître la victoire du Parti travailliste aux élections générales, en expliquant qu'elle était 《quelqu'un de très prudent》. (*Le Monde* 1999/11/30) (11月27日 (土) の真夜中ごろ、ヘレン・クラークは、大雨の中何時間も

待っていたテレビカメラに対して、やっと扉を開いた。次の首相 [男性] は労働党の勝利を確認するのに長時間かかったことを謝り [男性]、彼女はとても慎重な人間なのだと説明した。)

13) Malheureusement, le HCR est toujours utile. Et son patron actuel, Sadako Ogata, estime que le cinquantième anniversaire 《n'est pas une occasion de réjouissance》. Après une décennie à la tête du HCR, la Japonaise s'apprête à passer... (*Le Figaro* 2000/12/16)

(不幸なことは、HCR はいつも必要だ。現在の所長 [男性] の緒方貞子は、50周年記念日は「喜びの日ではない」と思っている。10年間 HCR の長の職にあったのち、その日本人 [女性] は...)

実際、Boel (1976) や Khaznadar (1993) が指摘するように、フランス語では人称代名詞はほぼ例外なく、指示対象の性に一致して用いられるようである。つまり、「女」を男性名詞で表すたびごとにこの問題は発生するということになる。Khaznadar (1993) にとって、(14) のように指示対象の性 [女] の明示されていない死亡記事はむしろショックである。また、Cresson 首相 [女] の任命の発表の際に、(15) のように、女を暗示する表現がまったくないことには疑義の声があがった。

14) Mort du poète italien Margherita Guidaci. Le poète italien Margherita guidacchi est mort. (*Le Monde*, 92) (イタリア人 [男性] の 詩人 [男性] M. G. の死。 イタリア人 [男性] の 詩人 [男性] M. G. が亡くなった。 [男性])

15) Le premier ministre a dit...Il a parlé de ... si l'on peut le croire...

(首相 [男性] は言った ... 彼 [男性] は話した ... 彼 [男性] を信じるとすれば)

カスティーリャ語には存在しないこの文法的な問題によって、フランス語では女の表され方にまたもや不都合が生じることになる。また、この現象は、フランス語の性の機能と性質をよく表わしているとも考えられる。「名詞には文法上の性がある」という意識の強さと、しかし、性別は指示対象を知る上で欠かせない情報であり、指示対象の性がわからないと落ち着かないという2つを両立するために、このような矛盾した状態が「女」に関してのみ生み出されたのだと思われる。ところで、一般にフランス語は明晰な言語であるといわれるが、この文法上の性の不一致とフランス語の明晰性との整合性はどうか説明されるのだろうかという疑問を抱かずにはいられない。

5 . 女性化の進められ方

5 .1 フランス語の場合

職業名詞の女性化は、社会の変化につれて言語が変わっていくという言語の変化の原則に適合したものである。フランス語が死んだ言語でない限り、言語の変化は当然のことであり、これまでも、新たな女性名詞が辞書に付け加わって来た。たとえば、1932 - 35年のアカデミー・フランセーズの辞書には、その前の1878年の版にはなかった *auditrice*、*avocate*、*pharmacienne* などの女性形名詞が付け加わり、男性名詞でしかなかった *chimiste*、*linguiste* などが、女性名詞としても認められている。

言語政策としての女性化は、カナダのケベック州、ベルギー、スイスでは一足早くすすめられている。フランスでは次のような経緯を踏み、政府の女性化推進が決定的となる。

1997年12月：ジョスパン首相および、シラク大統領は、公的文書において *la ministre*、*la directrice*、*l'inspectrice* などの役職名を女性化して使用することに決める。ところが、「個人」を強く示唆する語を使うことと、文書の永続性のあいだに法的な問題が生じるおそれがあるという異議が法務官僚から提出される。

1998年3月：ジョスパン首相は大臣に対して通達を出した。用語・新語審議会 (*commission générale de terminologie et de néologie*) にこの問題についての報告書の作成を要請したこと、INaLF (国立フランス語研究所) が女性形名詞の作成マニュアルを作ることになったことを伝え、また、*la secrétaire générale*、*la directrice*、*la conseillère* など、すでに日常で用いられている語については、報告書の完成を待たずに公文書で用いるように指示する。

1998年10月：用語・新語審議会が報告書を出す。報告の内容は、公文書では女性名詞は用いず、男性名詞を用いるのがよいということである。審議会のメンバーリストの最初にはアカデミー・フランセーズの Maurice Druon 氏の名前があがっている。

1999年：INaLF が、*Femme, j'écris ton nom* 「女よ、あなたの名前を書こう」を発行。職業名詞女性化のガイドブックができた。

2000年3月：文部省は中央官庁の局長宛に、公的職務にある「女」に対しては名詞を女性化して用いるよう指示 (B. O. E. N: 2000/3/9)。すでにその宛名人には女性化した役職名が並んでいる。

2000年4月：レジオンヌール勲章受勲者名簿 (JO. no97, 2000/4/23) には、*professeure* (大学教授)、*procureuse* (検事)、*recteure* (大学区長) などの肩書きがほぼ100%、女性化して書かれている。例外としては *conseiller maître à la Cour des comptes* 「会計検査院の

参事官」などがある。これに対し、アカデミーはなお遺憾の意を表明している (*Le Monde*: 2000/5/31)

今回の女性化論争の14年前の84年5月、イベット・ルーディ（女性権利大臣）は Commission de Terminologie relative au vocabulaire concernant les activités des femmes をつくり、女性化を進めようとしたが、その当時はアカデミーのみならずマスメディアにも受け入れられなかった。今回はアカデミーの反対は受けたものの、マスメディアは好意的である。la ministre は、98年になって突如として使用されるようになり、一種の流行語のようになって女性化を牽引しているように見える。しかし、実際の使用において「女」を表わす職業名詞すべてが「女性」で言及されるようになったわけではない。maire（市長）や préfet（知事）は同じく政治の分野の肩書きであっても、ほとんど女性化されていないし、「女」の割合が高いにもかかわらず médecin（医師）は常に男性名詞である。professeur も現在のところ女性化が進む様子は見られない。男性名詞として使用されてきた長い慣習を考えれば、女性化が定着するのに時間を要することは当然であろう。

5.2 カスティーリャ語の場合

前述のように、スペインで「女」の社会進出がさかんになり始めた20世紀初頭、「新しい女たち」は自分たちを la abogada のように「女性形冠詞 + 男性形名詞」で言及することを好んだ。これに対し、スペイン王立アカデミー会員や文法家は、男性名詞に女性形冠詞という組み合わせは許されないと非難し、「女」には la abogada のように女性形で言及するというカスティーリャ語の性質を尊重すべきだという立場を表わしている。女性化はフェミニズムとの関係でとらえられることが多いが、カスティーリャ語で最初に率先して女性化を推進したのはアカデミーである。ただし、アカデミーには非性差別的言語使用という視点はなく、あくまでも「カスティーリャ語の規範・伝統」からである。したがって、これまでのアカデミー編纂の辞書には、男性名詞としてのみ登録されている職業名詞も多く、その定義は偏りがあり性差別的だとして、1970年代後半以降、言語における性差別研究の中で批判されてきた。

その後、この女性化は、非性差別的言語使用を追求していくための政策として、80年代後半から90年代にかけ、社会・教育問題に携わる政府機関や Instituto de la mujer「女性局」により勧められる。「女」には女性形の冠詞をつけて女性名詞として使用することが当然であったとはいえ、語形が変わらない限り、冠詞や形容詞がつかない用法の場合には、次のように男性形のまま「女」に言及するということになる。

- 16) ...es que yo no era solamente diputado, ... (MUNDO, 1970/1/10)
(というのは、私は代議士 [男性形] というだけではなくて...)
- 17) Una mujer vieja y enferma, jefe del Gobierno israelí... (MUNDO, 1972/6/17)
(イスラエル政府の最高位 [男性形] 一人の年老いた病気の女性)

このような使用に対しは、それぞれ女性形 *diputada*、*jefa* が勧められ、より強く「女」の顕示が求められた。その後これらの女性形名詞は定着していく。ここまで一貫して女性形化をすすめてきた背景には、「女」を表わす女性形に帯びる否定的意味合いを払拭する目的があったと思われる⁷。このように、カスティーリャ語における女性化の特徴は、あくまでも非性差別的言語使用が重視されてきたという点である。

女性化が定着したカスティーリャ語においても、現在もなお辞書に男性名詞として登録されている職業名詞がある。これらは、女性形冠詞とともに使われるのが一般的である。たとえば、*canciller* (政府高官)、*soldado* (兵士) は、確認したすべての辞書で男性名詞として登録されてはいるが、実際には、以下のように男女同形の名詞として使用されることが多い。

- 18) La canceller gritó a Yutaka Kawashima en plena conferencia de prensa. (*International Press semanario en español*, 2001/5/19) (政府高官 [女性] は記者会見の最中に川島豊に怒鳴った。)
- 19) La soldado española Patricia Cipritia, del cuerpo de paracaidistas, contempla las zonas inundadas en un vuelo de reconocimiento en helicóptero. (*LA VANGUARDIA*, 2000/3/8)
(パラシュート部隊のスペイン人兵士 [女性] パトリスア・シプリティアは、ヘリコプターでの偵察飛行において浸水した地域を眺める。)

「非性差別言語使用」の追求の中で推し進められる女性化の流れにより、保守的、性差別的と言われてきたスペイン王立アカデミーによる辞書においても、この問題になんらかの対処さざるをえなくなり、新しく編纂される22版では、言語と性差別研究の専門家に依頼し、登録語彙とその定義のチェック機関を設けている (Itoigawa : 2000)。

5.3 両言語の比較

以上、両言語における職業名詞の女性化の経緯を概観した。

もともとは「男性名詞」であった職業名詞が「女」を指す際に、統語的一致、端的に言えば、冠詞を指示対象の性に合わせる事が問題なくすすむかどうか両言語間の第1の相違点である。原因は、言語の構造の差異にあると考えられる。この点については

稿を改めて引き続き検討することにした。

フランス語においては、一部の職業名詞が女性化されない一方で、代名詞などの照応表現は指示対象の性に一致させることが行われたため、文法上の性の機能までが崩れる結果をまねき、曖昧性が大きくなった。フランス語において女性化に長い時間を要したのは、規範を重んじるアカデミーと、それを支持し「言語保守主義に傾倒し、社会的エリートの言語使用を尊重する長い伝統による（Pastre（1997：371））と考える人は多い。「フランス人は言語の規範を重んじる」というとらえ方は強いようである（Yaguello：1998，Fleishman：1997など）。アカデミー・フランセーズの極端な保守性を抜きに考えても、ある言語変化に政府が条例を出すなどして、「変化を認める」（新たな規範を作っていく）ことで、規範から逸脱しない「正統なフランス語」、「正しいフランス語」を要求する点は、スペインのカスティーリャ語とは大きく異なる。

日常的な使用の中からうまれた「女性冠詞＋男性形」が出発点にあり、統語的に問題がないカスティーリャ語の女性化は、その後、形態的一致の問題へとすすんでいく。これは、当初、アカデミーの主張がきっかけであったが、その後、非性差別言語使用という目的で勧められていく。現在の状況に到った理由は、実際、この提案の影響が相当あるだろうが、カスティーリャ語の男性形・女性形の対立が単純であるという点も見逃せない。男性形語尾を-aにするかまたは、語尾に-aを加えるだけで女性形をつくることができ、これは、男性形語尾と女性形語尾が非常に複雑なフランス語との大きな違いである。

6．女性化の成果と展望

フランス語とカスティーリャ語の両言語において女性化が求められたのは何よりもまず、男女の性の違いによって、人の表され方に歴然とした非対称性が存在していたからである。女性化を押し進めることは、「女」を可視的なものにする言語を作り出すことになった。つまり、「女の不可視性」という問題に対し、女性化は一定の成果をあげてきたといえる。

カスティーリャ語では、女性化はスムーズであった。まず、女性名詞化が早い段階で終了し、次の段階として、「非性差別的言語使用」の追求としての女性形化がすすめられた。さらに今では、「女性」があらわれる頻度の問題も議論されるようになっている。1990年代に編纂された辞書においては、多くの職業名詞の記述において、例示のために女性形が使われている。辞書に「女」が現れることになったのである。たとえば、次のような例がある。

- 21) ingeniera química (SALAMANCA) (化学技師 [女性])
- 22) Mi médica recetó unas pastillas y me recomendó reposo (Maldonado Gonzalez: 1996 [CLAVE]) (私の医師 [女性] は、錠剤を処方してくれ、私に安静にしているようすすめた)
- 23) Denunció malos tratos ante la juez de instrucción (CLAVE). (予審判事 [女性] の前で虐待を訴えた)

フランスにおいても、長い論争を経て、98年以降政策としての女性化が決定的なものとなった。ただし、実際の使用が今後どのような形をとっていくのかは、今後見定める必要のある興味深い問題である。フランス語の女性化は社会的問題の解決であると同時に、統語的、及び照応における一致もたらし、コミュニケーションの道具としての言語の機能の修復にもなった。それは次の例において確認することができる。つい3年前には、このように「女」がはっきりと表現され、かつ曖昧性のないテキストはこの文脈ではあり得なかつたはずである。

- 24) Très populaire dans les sondages qui la désignent comme un premier ministre idéal, mais supportrice déclarée de M. Koizumi pendant la campagne électorale, Mme Tanaka prend la tête du ministère des affaires étrangères. Agée de cinquante-sept ans, députée depuis huit ans, la fille unique de l'ancien premier ministre Kakuei Tanaka,... (*Le Monde*, 2001/4/27)

(世論調査では、理想的な首相 [男性] として大変人気がある人 [女性] なのだが、選挙期間中は小泉氏の支持者 [女性] であった、田中氏 [女性] は外務省のトップの地位についた。57才 [女性] 8年前から代議士 [女性] である、田中角栄元首相の長女は...)⁸

しかし、女性化の未来を考えた場合、たとえこれが100パーセント実現したとしても、男女の平等に関する問題がすべて解決するかどうかは疑問である。女性化が一定の結果を出し、フランスのフランス語においてもこの問題が「終結した」とみる研究者もある (Yaguello : 1998 : 139)。しかし、女性化には肯定的な面ばかりがあるわけではなく、女性化の行き着く先に肯定的意義を見出さない研究も目立ってきた。それは、女性化を否定してきたこれまでの保守的な考え方とは全く別のものである。女性化に残された、または女性化からあらたに生まれる問題については別の機会に論ずることにしたい。

注

- * スペイン国家が多言語国家であることを積極的に認知する意味において、いわゆる「スペイン語」を指す呼称として「カスティーリャ語」を用いる。
1. Planelles (1995) がある。
 2. 同じ種類の議論は、1984年に政府が女性化を法的に進めようとしたことに対して、G. Dumézil と Cl. Lévi-Strausse が起草した "Déclaration faite par l'Académie française" (1984/6/14) が有名。アカデミー・フランセーズは1635年設立。その当時の *préciosité* (上品にふるまい、洗練された言語を用いること) を今も伝統として引き継いでいる。社交と学問の混合物。
 3. ヨーロッパ連合の言語委員会の方針でもある。cf. Conseil d'Europe (1990), Recommendation No.R(90) 4.
 4. この語は、文法的には女性であるが、指示対象は完全に中立的に男女を指すことができる。前述のヨーロッパ連合の勧告文書では、職業名詞の問題の他に、フランス語の *droits de l'homme* (人権) は男を指すのか人間を指すのか曖昧なので、*droits de la personne* に改めるようにと勧められている。
 5. ギリシャ語の *maieutikè*: 子供を産ませる技術に由来する。今は *sage-homme* (賢い-男) が有力であり、*sage-femme homme* (賢い-女 男の) = 「男産婆」という言い方の報告もある。
 6. 現在では、*la abogada*, *la catedrática*, *la diputada*, *la primera ministra* など女性形化して使用されているが、当時そうならなかったのは、女性形化によって「女」を強調することを避けるためであったと考えられる。
 7. 「女性」が有標であることから、「女」を強調するなどの意味合いが付与されるという現象は、その他の言語においても観察できる。カスティーリャ語における女性形が持つ意味合いについては、糸魚川 (1997) を参照されたい。なお、「非性差別的言語使用」でなされてきた提案が、過度な女性形化を求めていくことになり、アカデミーや使用者の反発を招いたという経緯もある。形態的対立が単純で、女性形が形成しやすいという点からうまれる問題といえる。事実、*médico/a* のように、*-o/-a* の対立で辞書に登録されているにもかかわらず、女性形 *médica* が使用されないものもある。
 8. ただし、カスティーリャ語では、「理想的な首相」も *primera ministra* と「女性」で表わされる可能性がある。

参考文献

- Boel, Elise (1976): "Le genre des noms désignant les professions et les situations féminines en français moderne", *Revue Romane*. 11, p.16-73.
- Campo Alange, Condesa de (1964): *La mujer en España: cien años de su historia 1860-1960*, Aguilar.
- Commission Générale de Terminologie et de Néologie (1998) : *Rapport sur la féminisation des noms de métier, fonction, grade ou titre*. (<http://www.culture.gouv.fr/culture/dglf/cogeter/feminisation/sommaire.html>).

- Diputació de Barcelona (1999): *El sexe de la notícia*.
- García Meseguer, Álvaro (1988): *Lenguaje y discriminación sexual*, Montesinos.
- Gutiérrez Cuadrado, Juan (dir.) (1996). *Diccionario Salamanca de la lengua española*, Santillana-Universidad de Salamanca.
- Fleischman, S.(1997): "The Battle of Feminism and *Bon Usage*: Instituting Nonsexist Usage in French", *The French Review*, 70-6, p.834-44.
- Houdebine-Gravaud, Anne-Marie (1998): *La féminisation des noms de métiers. En français et dans d'autres langues*, L' Harmattan.
- INaLF (1999): *Femme, j'écris ton nom*, La Documentation Française.
- Itoigawa Miki (2000): "La imagen de mujeres y hombres en los libros de texto" *Ligüística Hispánica*, 23, pp.19-37.
- Khaznadar, Edwige (1993): "Pour une première: la dénomination de la femme dans l'actualité, dichotomie, affixation et alternance" *Cahier de lexicologie*, 63-2, pp. 143-69.
- (2000): "Masculin et féminin dans la dénomination humaine: linguistique et politique. Aperçu de la pratique québécoise", *Le français moderne* LXVIII, pp. 141-170.
- Maldonado Gonzalez, Concepción (dir.) (1996). *CLAVE Diccionario de uso del español actual*, SM.
- Pastre, Geneviève (1997): "Linguistic Gender Play among French Gays nad Lesbians", *Queerly Phrased*, Livia, Anna (eds.), Oxford University Press, pp. 369-379.
- Planelles Iváñez, Monserrat (1995) *¿Masculino o femenino? Un intento de acercamiento al uso actual en francés y en español*, Universidad de Alicante.
- Rousseau, Jean (1998) : *Madame la Ministre : La féminisation des noms en 10 questions*, CIEP (Centre International d'Etudes Pédagogiques), (<http://www.ciep.fr/chroniq/femi.htm>).
- Yaguello, Marina (1978) *Les mots et les femmes*, Payot.
- (1988) "L'élargissement du Capitaine Prieur", *Contrastes*, p.73-77.
- (1998): *Petits faits de langue*, Seuil.
- 糸魚川美樹 (1995): 「スペイン語の性差 - 性の表わされ方に関する一考察」『ことばの科学』8号、p .109 - 124。
- (1997): 「スペイン語における女性形職業名詞 女性形名詞形成の背景と女性形が持つ意味合い」『イスパニカ』第41号、p .13 - 25。
- (1999) 「"la abogado" から "la abogada" へ カスティーリャ語における活動を表わす名詞と性について 」『ロマンス語研究』第32号、p .11 - 20。
- ディール、エルケ (1994): 「-Innen に慣れる 社会的現実の表現としての言語」、ローンシュトック、カトリン編: 『女たちのドイツ』(神谷裕子他訳 [1996]) 明石書店、p .137 - 153。
- バトラー、ジュディス (1990): 『ジェンダー・トラブル』(竹村和子訳 [1999]) 青土社。
- ハリデイ、M. A. K.・ルカイヤ・ハサン (1976): 『テキストはどのように構成されるか』(安藤他訳 [1997]) ひつじ書房。
- 藤田知子 (1990): 「言語と性差 フランス語の『性』(genre)について 」『異文化コミュニケーション研究』第3号、p .1 - 21。